

國際會議報告

ダニエル・オーバーマイヤー教授引退記念シンポジウム參觀記

森 由利亞

二〇〇二年九月十四日、十五日の兩日に涉って、カナダのバンクーバにあるブリティッシュコロンビア大學（UBC）において、北米を代表する中國宗教學者の一人、ダニエル・オーバーマイヤー Daniel Overmyer 教授の引退を記念するシンポジウムが開催された。氏は、UBCのアジア學科で二十五年にわたって教壇に立ち、二〇〇一年、學部における教授職から退かれたのである。この會は、本來なら一年前の二〇〇一年九月同日に開催される豫定であったが、九月十一日のニューヨークにおける世界貿易センタービル・テロにより、一年間延期された。筆者は、二〇〇二年七月に日本を訪れていたテリー・クリーマン氏からこの會が開かれることを

知らされ、オブザーバーとして參觀することとなった。

ところで、筆者は、それに先立つ二〇〇一年五月末より二〇〇二年三月末までの十ヶ月間、早稻田大學における特別研究期間制度を利用してアメリカ合衆國ロードアイランド州ブラウン大學に滞在する機會を得た。その間、主として近年にアメリカで出版された通俗信仰關係の論文を収集し、それに基づいて二〇〇二年六月の早稻田大學東洋哲學會において「近年の米國における中國思想・宗教研究―通俗信仰 popular religion and popular religion」という題目で口頭發表し、中國宗教學における通俗信仰 popular religion という概念をめぐってなされる議論の紹介を試みた（同内容の報告をすでに『東方學』一〇四號「二〇〇二、東方學會」に發表

した)。ただ、筆者の個人的な視野と力量の限界から、發表の主旨に直接關連するようなものにもかかわらず拙文に盛り込めなかつた重要な議論も多く、オーバーマイヤー氏の研究もその一つであった。いまの時點においてもなお、氏の研究内容に詳しく立ち入って論じる準備は筆者にはまだできていないが、今回のシンポジウムを見學し、氏をとりまく學會の雰圍氣というものに直接觸れることができたのは、大きな刺激であった。まずは今回の見聞に關して簡略に記し、東哲學會での發表の不足を多少とも補えれば幸いである。

オーバーマイヤー氏については、今さら筆者から事新しく紹介するような事は何もない。ただ、今回のシンポジウムの開會にあたり、トリニティ大のランドール・ナドー Randall Nadeau 氏から贈られたオーバーマイヤー氏への獻辭や、あるいはオーバーマイヤー氏自身の挨拶の中で、氏の中國宗教に對する基本姿勢があらためて明瞭に語られていたのは印象深い。その姿勢とは、第一に、宗教を普通の人々の生活に根ざした觀點から見るということである。この點については、氏が一九八六年に著した中國宗教に關する教科書である『中國の諸宗教—生きてゐるシステムとしての世界』*Religions of China: The World as a Living System*, Harper San

Francisco, 1986. の序文で次のように述べられている。「この本における」根本的な假説は、宗教とは、それが當初どんなに部外者を困惑させるものであろうと、日常生活の側面として、それを實踐する人に意味あるものとして「見たときに」、最もよく理解されるというものである。」(二頁)

このような姿勢は、その表現だけを取出せばとりたてて言うほどのものではないかのようではある。しかし、ともすれば三教という枠において中國の傳統を捉えようとする、それ自體非常に傳統的な枠組みを相對化するためには、この觀點は依然として有效であるように思われる。例えば、位牌を安置したり、香を焼いたり、紙錢を焚いたりといったような、中國の傳統宗教のあらゆる次元に浸透してゐるような實踐について言えば、これらの行爲を支え、互いに關係づけてゐる文脈は、三教のなかにも求められるのではなく、それらが使用される場そのもの上に、ひとつのトータルな文脈として見出されてしかるべきではあるまいか。後者の文脈を重く見た上で、それを中國の人々によって廣く共有されてきた宗教的文脈と見なすとき、それは往々にして通俗宗教 popular religion と呼ばれるのである。(但し、この言葉の用法をめぐって學者の間で見解が對立してゐることは前掲拙論を參

照。)

オーバーマイヤー氏自身は、やはり中國宗教の基盤を通俗宗教に求める立場をとる。これは、氏の中國宗教の歴史についてのとらえ方にも如實に反映されている。氏はエリアーデ編『宗教學事典』M. Eliade, editor in chief, *The Encyclopedia of Religion*, New York: Macmillan, 1987 の中で、popular religion に觸れ、その起源について次のように述べている。

周(戰國時代を含む―引用者注)や漢の資料には、あらゆる人々の間で流通していた祖先祭祀、神聖なものや土地に對する犠牲、鬼への信仰、驅邪、占い、靈媒の活動といった、種々の宗教實踐が書きとめられている。これらの實踐の多くは先史時代に始まり、そこから國家祭祀や儒教、道教といったより構造化され、かつ焦點の明確な傳統が出てくるような海を形成したのである。これら新たに現れた傳統は、自分たちを周圍の農工民から區別する必要がある社會的エリートと結びついた。その過程で、彼等(エリート)は、地域神に奉仕し即効性に關心を寄せる一般民衆の行う祭祀を批判し、また彈壓すらすらするようにいった。

(Vol. 3 p. 281a)

ここでは、祖先祭祀をはじめとする、中國社會の到る處に内在する、通俗宗教の基盤となるような宗教がまずあり、國家祭祀や儒教、道教はもともとそこから派生したものでありながら、通俗宗教に對して自己を差異化してゆく方向へと發展を遂げたとされている。ここには、あたかもいわゆる淫祠こそが中國の正統の宗教であり、儒教や道教はそこから自己を差異化するためにそれらを「淫」なるものとしていったという含みが感じられる。

今回、オーバーマイヤー氏自身によって確認された第二の研究上の基本姿勢は、西歐の文脈で發達した宗教學の假説を中國の宗教にそのままあてはめることを厳しく戒めるという事である。氏は、あくまでも資料に即して細かな點から整合性を追求して行くことを重視する。これもまた歴史學者としては至極當然のことであるかと思われるが、氏がアメリカの宗教學の中樞とも言うべきシカゴ大學で、ジョゼフ・M・キタガワ氏等の指導のもと Ph.D. を取得している事實をも考え合わせれば、この姿勢もやはり興味深い。三教の修辭に彩られた宗教文化の中に、通俗宗教を基盤とする獨自の關係性を見てゆく氏の視點は、やはり宗教學の方法論による陶冶を経て形成されてきたものであろう。しかし、その方法が中國の

事例への押しつけにならないようにとの配慮がここにあらわれているものと思われる。また、氏は厳密な資料批判にもとづく中國の通俗信仰研究を通じて、中國を基盤とした宗教學のモデルを構築する可能性にも觸れておられた。宗教學の土俵そのものを中國の通俗信仰に移して、それを根本から再構築しようとする企圖が、そこにはあるかのようである。

次に、シンポジウムの参加者について見てみることにしよう。

この會に集まったのは、オーバーマイヤー氏が大學や大學院で教えたことのある研究者や、氏と共同研究を行ってきた人々、また研究領域の接する學者たちであるが、そこには、文昌帝君の研究で知られるテリー・クリーマン氏、臺灣鸞堂研究で知られるフィリップ・クラート氏、最近中國の觀音信仰史に關する浩瀚な研究を上梓された Chün-fang Yü 氏、ともに福建の道教および通俗信仰研究で知られるジョン・ラガウェイ氏とケネス・ディーン氏、オーバーマイヤー氏との共著のある中國宗教人類學者、デヴィッド・ジョーダン氏、白蓮教の研究で知られるバールント・テル・ハー氏とスーザン・ナキン氏、近世道藏文獻學者として知られるジュディ・ナキン氏、臺灣の通俗信仰や永樂宮の呂洞賓信仰研究で

知られているポール・カッツ氏といった人々が含まれている。現在、中國の通俗信仰を論じる上で無視することの出来ない研究者たちが一堂に會して、オーバーマイヤー氏に惜しみない贊辭を送っているさまが見てとれた次第である。

以下に、プログラムを掲げて、發表題目と發表者名を挙げしておく。

十四日

第一部「ダニエル・オーバーマイヤーと中國宗教の研究」司會：ポール・クロウ Paul Crowe (UBC)

「開會の辭」フィリップ・クラート Philip Clart (ミズーリ・コロンビア大)、ダイアナ・ラリー Diana Lary (UBC)、ジョシュア・モストウ Joshua Mostow (UBC)、スーザン・ナキン Susan Naquin (プリンストン大)。

「河北農村における廟祭」ダニエル・オーバーマイヤー (UBC)

第二部「中國の通俗信仰についての民俗誌學的視點：新しいフィールド調査」司會：ステイヴン・ハレル Stevan Harrell (ワシントン大)

「福建長汀縣の宗教をめぐる歴史と社會」ジョン・ラガウェイ John Lagerwey (パリ高等研究院、宗教學科)

「無限の功德：臺灣の宗教的出版行爲における倫理的（かつ現實的）經濟に關するノート」フィリップ・クラート（ミズーリー・コロンビア大）

第三部「中國通俗信仰の諸主題：演劇・夢・憑依」司會：キャサリン・スワテック Catherine Swatek (UBC)

「粵劇の女優とその神祀り・祖先祭祀」メアリー・ヨング Mary Yeung (UBC)

「陳士元と中國の夢占いの論理」ロベルト・オン Roberto K. Ong (オーロラ中國文化教育協會 [バンクーバー])

「中國の文化と宗教における憑依の役割：青銅器時代から現代までの概観」ジョーダン・ペーパー Jordan Paper (ヨーク大)

第四部「宗教結社と結社の經典」司會：チュンファン ウィ Chün-fang Yü (ラジャース大)

「二つの眞武寶卷」シンイー チャオ Shin-yi Chao (UBC)

「マレーシア、シンガポール、タイにおける一貫道の近年の展開」スー・キン・ワ Soo Khin Wah (マラヤ大)

「通俗在家結社と儒教：臺灣一貫道の研究」クリスチャン・ヨアヒム Christian Joehim (サンノゼ州立大)

十五日

第五部「中國通俗信仰におけるシンクレティズムと結社信仰」司會：リ・チュアン・ペーパー Li Chuang-Paper

「臺灣のシンクレティズムと結社信仰」デビッド・ジョーダン David Jordan (カリフォルニア大サンディエゴ校)

「昇天して雲に立つ：ペナンの太上老君廟における道教のおしえとその實踐」ジーン・ド・ベルナルディ Jean DeBernardi (アルベルタ大)

「宗教・儀禮・反亂：1915年臺灣西南部における西來庵事變」ポール・カッツ Paul Katz (中央研究院)

第六部「佛教・道教・通俗信仰」司會：スーザン・ナキン

「雍正帝と高僧」バレント・テル・ハー Barend ter Haar (ライデン大)

「扶乩について：『道藏』からなにを學べるか」ジュディ ス・ボルトツ Judith Boltz (ワシントン大)

「道教の儀禮的枠組みへの代替的アプローチ」ケネス・ディーン Kenneth Dean (マギル大)

第七部「道教倫理と内丹」司會：ジュディス・ボルトツ

「道教戒から再構築する（教團の）實態」テリー・クリーマン Terry F. Kleeman (コロラド大ボルダー校)

「初期全眞教の死とその實際」ステイヴン・エスキルセ

Stephen Eskildsen (テネシー大、チャタノーガ校)

「李道純に關するいくつかの豫備的考察と無上正眞の道」
ポール・クロウ (UBC)

以上に掲げた發表のうち、いくつかについてその内容を簡単に紹介していきたい。なお、各發表内容については筆者の記憶違いや内容の取り違いによって、誤りを生じている箇所もあるかも知れないことをお断りしておく。

まず、ダニエル・オーバーマイヤー氏は、「河北農村の廟祭」と題して基調講演を行い、2000年に河北省保定縣(北京の西南)の鄉村地域で行った現地調査の成果を撮影した寫眞資料をまじえて紹介した。氏の大連における調査方法は、ジョン・ラガウェイ氏やケネス・ディーン氏とともに福建の調査に同行することで、彼等から學んだ所が大きいとのことである。ここには多分に氏の謙遜な人柄が反映されているが、歐米の學者ネットワークを通じて彼等の方法論が広がっていく状況の一端に觸れる氣もした。そして、このような方法の傳授は確實に大きな成果に結びつこうとしている。オーバーマイヤー氏は、次第に河北における現地調査を軌道に乗せ、やがては東南部の調査事例と比較することを意識しているという。同じ方法論を用いてデータを検討することで、地

域間の比較研究が効率化されることが期待される。また、氏の提供した現地報告は、河北省における宗教の復興状況を雄辯に物語るものであった。とりわけ驚かされたのは、かの地で羅教の系統にある弘陽教が復興されており、無生老母が廟に祭られているさまである。

ラガウェイ氏は「福建長汀縣の宗教をめぐる歴史と社會」において、氏が一九九九年以來進めている長汀縣に關する調査報告を行った。長汀縣は、福建の客家の中心地である汀州の政治中心として千年以上の歴史を有している。ここでは、長汀縣を中心とする各都市における年間祭祀と祭祀の對象が、それぞれの地域の歴史とともに概説された。近年、ラガウェイ氏が中國東南部で行った調査の成果は例えば『中國傳統科儀本彙編』のような續々出版される浩瀚な資料集にも含まれていることは周知の事實である。大陸に残る宗教傳統が、徹底した調査の對象になっている感があるが、この發表では、そのような氏の關わる一連の調査の中間報告として見ることが出来る。その調査の基本は、まず縣單位で調査地を選定し、縣全體の都市の居民に對して年間に行われる主要な祭祀を記述するように依頼する一方、學者たちは主たる家系と、道教儀禮の地方形態をめぐってフィールドワークを行う

というものである。やがて中國全土における大體の宗教狀況を知るに足るような巨大なアーカイブが形成されて行くことが充分豫想される。

クラート氏「無限の功德：臺灣の宗教的出版行爲における倫理的（かつ現實的）經濟に關するノート」は、臺灣の鸞堂における善書の刊行をめぐる金銭的な經濟と、信徒における功德の創出という倫理上のしくみがびたりと重なり合っている狀況を指摘する。鸞堂は、地域の廟信仰などには依存することがなく、經濟的な援助を地緣的コミュニティから期待しているのができない。そうした狀況にあつて、鸞堂の經濟を支えているのは、扶乩による善書の刊行を手段とする新しい信徒の獲得である。クラート氏が關心を寄せるのは、善書を刊行して世間を教化することは、鸞堂の信徒にとっては非常に大きな功德とされており、それはそのまま善書という印刷物の世間における流通という形に置き換えが可能とされる點である。ここには、善行悪行を數量化、計量化する善書の思想の展開の一端が示されているものとみなせよう。

Chao氏「二つの眞武寶卷」は、成立年未詳の『玄帝寶卷』（『寶卷初集』二十六冊所收）と、『眞武菩薩得道寶卷』（オーバーマイヤー氏の藏書）によりながら、玄帝（玄天上帝）が

中國近世の宗教の様々な類型的な役割や、狀況の中に組み込まれ、轉移して行くさまを示唆する。前者の『玄帝寶卷』は、中國佛教がくりかえし經驗する出家と孝の論理の對立を玄帝が主人公となって經驗する物語として分析され、後者は玄帝が羅教に攝取されて行ったことを示唆する文獻として論じられる。尙、發表者のChao氏は、近年玄帝信仰を題材として積極的に發表を續けているJBSの博士課程在學生である。

ヨワヒム氏は「通俗在家結社と儒教：臺灣一貫道の研究」において、二十世紀に入ってからの一貫道の歴史（とりわけ臺灣に入った一貫道）と教義を概観し、彼等にとって儒教がどのように理解されているのか、その理解の枠組みと具體的な解釋法を論じた。ヨワヒム氏の問題意識は、一般に民間信仰レベルにおいて儒教が廣く吸收され、行き渡っているということが言われるが、それは實際にどのようなやりかたにおいてなされているのか、という點にある。發表者自身の言によれば、このような問題を立てる背景には、やはりオーバーマイヤー氏の視點があるのだという。すなわち、オーバーマイヤー氏は、民間佛教folk Buddhismや寶卷信仰を核とする結社の役割を、（既存の宗教に對する）代替alternativeとして位置づけたことがある。これは、内容的に新しい者を提

供するという意味ではなく、むしろ内容的には舊來のものとかわりなくとも、それを地域の廟信仰や僧侶や道士のような傳統的司祭職に依ることのない集團という形式のもとで實踐する點に新しさがあるとされる。しかしながら、通俗結社信仰が儒教に對して果たす代替としての役割は、實は具體的に檢證されていないのではないか、というのが發表者の問題提起なのである。ここでヨワヒム氏が批判の對象とするのは、

一方の極に高度な文獻解釋の方法に裏付けられたエリート知識人の擔う儒教を想定し、他方の極に無意識的に儒教の倫理道德觀を攝取する通俗的な極を想定する見方である。氏は、一貫道における論語解釋が、それ自體としては非常に訓古學的な形式を踏襲している點を指摘する。しかし、彼等の解釋は、同時に三教の用語を縦横に驅使し、それを独自の體系に編み込んでいるという。また、例えば「朝に道を聞かば……」の句については、「夕べに死す」ことが日常の心が死に、かわって道心が自己の内に生じてくることを言うくだりとして解釋するなど、正統的理解とは異なる解釋が施されることを指摘する。つまり、一貫道における儒教とは、儒教的倫理を漠然と受容しているというのではなく、きわめて意識的に儒教文獻を解釋し、その過程で自らを一般的儒教とは差異化

する意識すらはたらいっているという狀況が浮き彫りにされる。もっとも發表者は、學者達の間では、きびしく教義の整合性をはかるうとする一貫道のやりかたは、臺灣の通俗信仰結社の中では獨自のものとみる見解のあることを認めている。そうなると、一貫道の儒教に對する姿勢をどの程度一般化することができるかは、更に問われねばならないであろう。

ジョーダン氏は「臺灣のシンクレティズムと結社信仰」の中で、現代の結社信仰の分析において價值剝奪説 *devaluation hypotheses* が幅をきかせている點を問題としてとりあげる。個人が結社に参加する理由を考察するにあたり、價值剝奪説は、その個人が何か―多くの場合それは何らかの特権や健康、富である―を奪われたと感じていることを重視する。しかし、この論の弱點は、個人の感じている不満の客觀的根據―即ち價值剝奪の事實を實際に證明して見せることが困難な點にある。その一方で、ジョーダン氏は結社信仰を論じる上でそのシンクレティズム（折衷主義）を分析することが有効であるとす。氏は宗教にシンクレティズムが攝取される所以を四つの局面に分類し、それに基づいて臺灣の結社信仰を論じる際に有効な價值剝奪説があり得ることを示唆

するのである。氏によるシンクレティズムの四分類とは、(1) 純然たる歴史的事實としてのシンクレティズム：これは初期キリスト教のシンクレティズムのように、ある宗教が(不可避的に)周囲の環境から種々の要素を攝取する場合がその例であるという。(2) 意識的に新しさを演出するためのシンクレティズム：意識的に既存の様々な宗教的要素を採り入れて、新しい宗教を構築する場合。ただし、これは宗教を興す當事者の視點からすると、新しい宗教の構築そのものを意圖するというよりは、むしろその宗教を正統的なものとするための不可欠の要素として、傳統の中からしかるべき要素を借用し、それを組み合わせることで独自の傳統基盤(例えば固有の經典)を形成しようとする意識として顯れる場合が一般的那样である。あるいは、このような折衷は、單にその活動が「宗教である」ことを示すための記號であるにすぎないこともある。例えば、中國で新たに宗教結社をたちあげると、信徒は法名を有し、蠟燭や香をともし、紙錢を焚き…といったようなきまつた習俗を踏襲する場合が多い。こうなると、シンクレティズムは傳統的存在のためには不可避的な要素であることにもなる。ただ、それがどこまで「意識的」であるとするかは研究者の視點によって異なりそうである。(3) 修

辭的戰略としてのシンクレティズム：シンクレティズムを採用することは、その宗教の優位性を示すための修辭的な方便として有効性を發揮する。既存の宗教の傳統のエッセンスを集めた結果、それらの宗教に代わる、よりすぐれた宗教を形成することができるという視點があり得るといふことである。臺灣の一貫道はその好例であるという。一貫道は、三教の傳統から種々の要素を借用し、その結果として、儒佛道の個々の傳統よりも古く、正統的であるとされ、三教が個々の傳統として存在する必要を否定する。(4) 否定的シンクレティズム：これは既存の傳統から諸要素を繼承するさいに、ある要素を採用することで同時にその傳統の中に採用すべきではない、斥けるべきものを指摘して、結果として傳統批判としての役割を果たす折衷主義である。臺灣の結社信仰においては、傳統から様々な要素を攝取していることが積極的に主張されるが、同時に、彼等は自分たちが採用しなかつた要素を「迷信」的であると指摘したり、舊宗教の墮落を批判する事例に事欠かないという。かくて、否定的シンクレティズムは、一方では既存宗教から當該結社を差異化する作用を果たし、他方では既存宗教に對する優越性を主張するための基盤を提供する。

このようにシンクレティズムの諸局面を取り出した上で、ジョーダン氏はこれを價值剝奪に關する議論と結びつける。

氏によれば、價值剝奪の事實は一般に檢證が困難であるものの、近年における臺灣の宗教結社に、近代的な教育制度から疎外された人口が流入しているように見えるような議論には充分検討の餘地があるという。筆者が思うに、氏の提起する問題は、從來の議論には（氏の意圖するような意味での）宗教結社の一般的な性格を論じるための枠組みが提供されていないため、その宗教の要素を取り出して論じても、それがその宗教の性格全體にどうかかわるか、かの判斷に結びつかない、という點に存するのではなからうか。そこで氏は、シンクレティズムを結社信仰の重要な側面として位置づけ、それをさらに細かく四つの作用局面に分けることで、信徒たちの意識する價值剝奪が、どのような局面において生起しているかをより細かく検討し理解するための媒介的枠組みを提供することを目指したものと思われる。

カツ氏は「宗教・儀禮・反亂：一九一五年臺灣西南部における西來庵事件」の中で、一九一五年に臺南、高雄を中心に臺灣の在來民族と漢民族とが結んで日本の警察に對して蜂起したいわゆる西來庵事件の宗教的背景を考察する。日本軍

ダニエル・オーバーマイヤー教授引退記念シンポジウム參觀記（森）

による虐殺が熾烈を極めたことでよく知られているこの蜂起の宗教的背景については、從來、日本軍が反亂勢力を「齋教」と規定したことから、そのように見る學者が跡を絶たない。しかし、カツ氏は、當時の状況に關する記事を精査することで、そのような見方が正當とは言えないことを指摘する。

氏の指摘では、むしろ、當時齋堂で活動していた信徒たちは、西來庵の領導者である余清芳による蜂起參加の呼びかけを拒否していることも資料から跡づけることができる。それに對して、西來庵の宗教は、吃菜をその一部に含むものの、その庵全體は疫神を祀る廟であり、單純に他の齋教と一括りにはできないという。また西來庵では、犠牲を捧げて旗を祀る祭旗が行われ、それは日本への密通者が旗の前で處刑されるような、過激な事例も含んでいるという。さらに西來庵では、神兵を含む遠來の援軍や太平の到來を預言する、千年王國的運動として當事者に理解されていた點も注目される。氏はこれを齋教の枠組みを超えた、種々の異なる宗教的要素が含まれている状況として解し、後期帝政期における通俗宗教と反亂勢力の結びつき全體に照らして検討されるべき課題であるとする。

ボルツ氏「扶乩について『道藏』からなにを學べるか」で

は、氏による『道藏』の中に存在する扶乩文獻に關する調査の一端が披露された。氏は、先行する研究業績として鍾肇鵬による「扶乩與道經」(『世界宗教研究』一九八八・四)を擧げ、そこで『道藏』所收の扶乩文獻がリストアップされていることを述べる。しかし、その内容はいまだに完全とは言いがたいようでありさらに嚴密化してゆく必要があるという。

また、第四十三第天師の張宇初は扶乩を斥けており、『道藏』編纂の過程において扶乩が採り入れられた経緯の調査の必要も指摘した。また、『道藏』に收められた扶乩文獻として、とくに氏が注目するのは道藏外にも異本の存する『法海遺珠』所收の紫姑神信仰に關する文獻である。

ディーン氏「道教の儀禮的枠組みへの代替的アプローチ」は、最近出版されたロバート・ハイムズ『正統的道とバイパスとしての道：道教、地域宗教、宋代と近世中國の神格モデル』(Robert Hymes, *Ways and Byways: Taoism, Local Religion, and Models of Divinity in Sung and Modern China* (Berkeley: Univ. of California Press, 2002))の中に示された、ディーン氏の著作に對する批判に反論する。ディーン氏は、その著『東南中國の道教儀禮と民間祭祀』(*Taoist Ritual and Popular Cults of Southeast China*, (Princeton: Prince-

ton Univ. Press, 1995))において、福建閩南で行った現地調査にもとづき、地域の祭祀空間において道教儀禮が極めて中心的な役割を果たし、祭祀空間全體を構造化しているとみなした。しかし、ディーン氏の理解によれば、ハイムズ氏はこの點を批判し、南宋以降の道教と地域祭祀との關係はそのように調和的なものではないとする。ハイムズ氏は南宋以降において發達した地域民と神格との直接的な交渉關係は、官僚的な仕組みを通じて神々の體系と關わりとする道教の戰略とは食い違ふものであり、道教は地域の神格信仰を制御できなくなっていると見る。ディーン氏は、このようなハイムズ氏の見解を個人と神格との無媒介的な結びつきをより重要なカテゴリーと見なすものと批判し、道教や地域神祭祀を含めて、中國の傳統儀禮が相互に織りなす關係は多様であることを認めるべきであるとする。ここには、道教が中國の地域宗教において果たす役割について、大きな見解の相違が存在することが改めて明確にされている。(尚、この問題は、とくに丸山宏氏がディーン氏の上述の著作をめぐって論じている。丸山宏「民間宗教」『しにか』八〇大修館書店一九九六年、十一月参照。)

テリー・クリーマン氏は、「道教戒から再構築する」(教團

の「實態」において、一般に初期の五斗米道については内部資料が残っていないことから、その活動を知るのが難しいとされているが、これは必ずしも妥當でないことを指摘する。とくに『女青鬼律』や『正一威儀經』をはじめとする天師道（五斗米道）の戒律を記した文献を注意深く検討することで、最初期の五斗米道の實態の一部を再構築できる可能性を氏は示唆する。例えば、合氣に關する禁止事項の記述は、（合氣そのものの全面的禁止というよりは）様々な状況における合氣の問題を指摘しており、初期の教團の通過儀禮において實際にそれがなされた形跡を示唆していると見る。

ステイーヴン・エスキルセン氏「初期全眞教における死とその實際」は、王重陽から王志謹に至る全眞教關係資料から、全眞道士たちの死や病をめぐる態度に觸れる記述を取り出し、當時の全眞教における理想化された死と、現實に道士たちが見舞われた死との共通點や差異を分析し、いずれにおいても全眞教道士が肉體や現世からの離脱を目指している點を指摘する。

以上、シンポジウムにおける發表の中からいくつかを採りあげて紹介した。このようにして見ると、實に多様な論點が

盛り込まれていることが實感される。意外だったのは、通俗宗教が議論の中心にあるにもかかわらず、この語の用法をめぐる議論が、ほとんど見られないことである。このことが即ち通俗宗教に關する定義上の問題が乗り越えられたことを意味するわけではもちろんないだろう。ただ、多くの研究者の關心は、ひとまず通俗宗教として作業假說的に括られた領域の中に、さまざまな個別の問題を見るようになっており、通俗信仰という領域を限定すること自体にあまり大きな價値を置かなくなりつつあるのかも知れない。そのような事を考えさせられた。